

# 満州

## 労苦体験の記憶をたどって

北海道 佐藤 サト

はじめに

敗戦から半世紀以上も過ぎ、記憶も薄れて今さら何をどう書けば良いやら迷ってしまっていますが、忘れられない悲惨な体験を振り返って書いてみようと思います。

昭和の初めのころに満州に渡り、生活や習慣の違うよその国で暮らした十一年間の最後に体験したのは、想像したこともない敗戦というまことに哀れな結末だったので。日本が戦争に負けたた

めに、満州の開拓地に住んでいた私たちは、体験した者でなければ分からない、悲しくつらい思いをしました。戦争が起これば家族の生活がめっちゃめちゃに壊されてしまったり、肉親を失うなど残酷この上も無いことになるのに、どうしてまだ戦争の無い世の中にならないのでしょうか。

皆さんのように上手には書けません、少しでも良い世の中になるために、お役に立てばと思います。書きますので何卒お許しください。

### 一 満州移住までの生活状況

私は、大正六（一九一七）年八月三十一日、岩手県大船渡市で七人兄弟妹の長女として生まれ、兄一人と、あとは弟妹でした。父は製材所の木挽き仕事をしていましたが、会社の番頭さんと一緒

に山買い（入札）の責任ある仕事もしていたそうです。家庭はごく普通の平凡な暮らし向きでしたが、昭和初期の世界恐慌や凶作による農村の疲弊については、申し訳ないけれどもほとんど知らずに過ごすとこの環境で育ちました。

私が小学校二、三年生のころに、同じ商売をしていた親戚の勧めで、木炭や米俵を販売するようになり、母が店の方をやっていたようです。家が街道沿いだったことと親戚の助言もあって、店もだんだん大きくなっていったようでした。兄が実業補修科を卒業して、仙台の間屋さんに修行に行ったので、私と弟が配達を手伝いました。小口の米の配達は、二人で背負って届けましたが、夏、カツオ船が港に入ると、大口の注文が入りました。出港までのわずかな時間に、一カ月分の食料を船に納めるために、日が落ちてからも懐中電灯をつけて弟と一緒に配達したものです。その弟も、後に満州弥栄村イヤサカムラに来て皆さんのお世話になりましたが、昭和十六（一九四一）年北支で戦死し

ました。

さて、私が結婚して満州に行くことになるいきさつを書きます。主人の家と私の家は親戚関係でした。主人の家は家柄も良く、祖父が村長を勤めました。そのとき村の事業が失敗し、家の山や田畑を失うことになったそうです。借金を返済するために、主人は長兄と次兄と三人で屋根瓦の製造を始めて、一生懸命働きました。主人は満州に行くまで手伝いをしていました。

昭和七年、主人は満州第一次武装移民団員として、岩手県六原の青年道場で訓練を受け、弥栄村岩手班の一員として満州に渡ったのです。

渡満三年目に及川さんと主人が、岩手班の代表として仲間の皆さん八人の花嫁を迎えに帰って来ました。主人は結婚を約束した人がいたようでしたが、相手の家族や親戚が満州へ行くのでは駄目だと反対したため、破談になったというのでした。主人の母親から私に満州に行かないかと話があり、私も満州には憧れていたもので、その場で承

諾の返事をしたのです。慌ただしく、ささやかな結婚式を挙げてもらいました。

昭和十年四月十一日、及川夫妻と私たち夫婦は、一緒に大船渡を出発しました。一緒に満州に嫁ぐ八人の花嫁さんとは、途中の盛岡で初対面の挨拶をしました。全部の方のお名前は思い出せませんが、菅原フジエさん、菊池トメノさん、菅原きちさん、山崎ミツさん、蒲田トシさんの名前を覚えています。この方々とはいったん駅のホームで別れ、私たちは東京に住んでいる主人の兄さんのところに渡満の挨拶に行き、一泊しました。盛岡の方々とは翌日、東京駅で落ち合いました。

元気に振る舞っている人もいましたが、写真見合いの人はやはり心配そうな顔をしていました。一緒に東京見物をして、列車で福井県敦賀港に向かいました。敦賀に到着してから船の出発までに時間があつたので、満州で待っている旦那様にお土産を買うなどして、ときを過ごしました。乗船して間もなく出港しました。投げたテープを手に

しているのは、お互い知らない人でしたが、テープが切れるまで別れを惜しみました。いよいよこれで内地も見納めかと思うと、自然に目頭が熱くなってきました。

航海しているうちに、先々への心配がつのつて不安になるためでしょうか、船酔いも加わって体の具合が悪くなる人が出てきました。主人は介抱するなど大変でした。何しろ、引率するのが及川さんと主人の男二人だけです。仕方ないことですが、私はひとりぼっちでさみしい思いでした。花嫁さんの一人、菊池トメさんが特別船酔いがひどく、主人はほとんど付きつきりで介抱していました。

敦賀港から三日がかりで朝鮮の清津港に着き、汽車で国境を越え、ハルビンに向かいました。食事が脂っこいものばかりで困りましたが、今になって思えば鴨の丸焼きを食べなかったのが残念でした。ハルビンから松花江シヨウカコウを船で下り、佳木斯チヤムスに着き、迎えに出ていた旦那様方に花嫁さんをお

渡しました。引率者としての責任を無事に果たしたので、主人は肩の荷がおりたと言ひ、私も嬉しくなりました。

佳木斯に一泊して四頭立ての馬に乗り、十五里の道を永豊鎮エイホウチンに向けて出発しました。途中、日章旗が空高く翻っているのを見て感無量になり、思わず涙が出てきました。聞けば匪賊の通り道で、最近も匪賊の攻撃があったと聞いてなんだか心配でしたが、何事もなく孟家崗モンジャカンに到着しました。

岩手班はさらに二里も奥地に住んでいるのとこのとでしたので、学校でひと休みしました。山形班の江口秀子先生が、子供たち五、六人に教えていました。子供たちは学校の寄宿舎に入っていて、岩手班の伊東孝喜治さんのおばあちゃんが世話をしていました。日曜日に親たちが迎えに来るということでした。人も馬も十分休息したので、元氣を取り戻し出発しました。そして夕方近く、皆さんが待っている岩手班に到着、その晩早速合同結婚式を挙げてもらいました。花嫁さんたちを引率

して来た及川さんと主人は大役を果たし、本当に安心しました。

## 二 満州弥栄村の開拓と生活の状況

はるばる遠い満州の地に着きました。その晩は興奮してほとんど眠れなかったことを今でもよく覚えています。翌朝室内をよく見たら、練った土を厚く積み上げ、内壁に紙を貼った満州式の住宅でした。その住宅は二棟建っていて、一棟に二家族が住む共同生活でしたが、炊事は先輩方が作ってくれました。私たち新参は、その食事を自分の部屋に運んでいただきました。

そのうちに本格的な住宅建築が始まり、一棟二戸のオンドルペチカを備えた立派な日本式住宅ができ上がり、家族がそれぞれ独立した生活をするようになりました。主人は弥栄開拓団本部のレンガ工場主任に配置となり、毎日孟家崗まで二里の道を歩いて往復していました。冷たい風が吹く夕方、帰りの遅い主人を待っていると、真っ赤な夕日を背にして急ぎ足で帰って来る姿を見付け、

ほっとしてお汁を温めたりしました。

弥栄には就学児童がたくさんいましたが、教科書も帳面もないので、児童を教室に集めて先生がお話をしたり、唱歌を教えてくださいました。先生方が親身になって指導してくださったのは、本当に有り難いことでした。

ひと冬岩手班で暮らした後、毎日通うのは大変だろうと、孟家岡に引っ越すことになりました。

そのうちに、農建組合で働いている菊地喜惣吉さん、高橋さんと仲間が多くなり、また山崎勝郎さんの奥さんから編み物を教わったり、他県の奥さんたちからもいろいろなことを教えてもらうなど、楽しい毎日でした。

弥栄組合が旅館を経営しており、栃木班の越井さんが運営を任されていましたが、奥さんがおめでたで辞めることになりました。あとを私どもにも引き受けてほしいと頼まれました。私は、内地でいろいろ働いてはいましたが、炊事や料理などの

経験がありませんでしたので、再三お断りしましたが、仕事について越井さんの奥さんからアドバイスをいただく約束で、とうとうお引き受けすることになりました。泊まりに来るお客さんは岩手班の部落の人が多かったので、あまり気を遣うこともありませんでしたが、越井さんから肉じゃがを、山崎さんからはサラダの作り方を教わりました。演習で軍の偉い方が泊まるときの食事は、中華飯店から取り寄せました。

二、三年して私たちにも子供ができたので、この仕事を辞め東門に家を買って、そこで終戦前避難を始めるまで住みました。レンガ工場に近く、学校、病院、お寺など公共施設も近くにあり、隣には新潟班の小玉さん、小野塚さん、斉藤さん、猪又さんが、向かいには青森班の小又さんが住んでいました。時々皆さんのお宅に伺ったりしましたが、そんなお付き合いの中で漬物の漬け方などが、いろいろなことを教わった楽しさを忘れることができませぬ。

昭和十六年十二月八日、組合に行っていたところ、「戦争が始まったぞ、大変なことになるなあ」と事務所の人と話しているのを聞きました。これが一生忘れることができない大東亜戦争の発端でありました。

### 三 終戦直前から避難引揚げの実情

戦争がだんだん激しくなり、弥栄の父さんたちも次々と召集されていきました。ラジオも変なことばかり放送するようになり、日本が負けるのではないかという話も聞こえてきました。ひよつとすると、とは思っておりましたが、最後の総動員で主人も召集され、八月十日に出発してしまうと、ひとりぼっちになって不安がつわり、本当に日本は大丈夫なのかと思いました。

佳木斯の人たちが弥栄に疎開してくるようになって、これから先いつたいたいかなのかと思っていました。これは中止になってほっとしました。夜遅く岩手班の小林さんが来て、「村公所の会議で弥栄の人たちも避難することになった。明

朝六時までに弥栄駅に集合すること。携行品は食糧一週間分と冬物衣類」と伝えられました。これまでいろいろなうわさ話を聞いても「日本は負けるものか」と強気でしたが、避難すると聞いてひよつとすると、と思い始めました。

男手がないし、気が動転してしまいましたので、ただ思いつくままに準備をしました。まず軍用に米を詰め、次に御仏壇の掛軸、子供の位牌、預金通帳、保険証などをハンドバッグに入れ、大きなトランクに幼い子供のオムツや冬物衣料、食糧そのほかを入れ、野宿をしたときに困らないように、毛布と角巻も持ちました。日本の馬二頭を貸したり、普段から仲良く付き合っていた近所の満人の所へ行き、あとのことをいろいろ頼みました。

翌朝、満人にお焼きを作ってもらって、駅まで馬車で送ってもらいました。みんなで列車を待ちましたが、どの列車も通過して行くだけでした。今日は朝方からかんかん照りで、集まった人たち

は暑さは厳しいし列車には乗れないので、みんな  
いら立っていました。

列車に乗れないまま、とうとう夜になりました。  
みんな駅の周りで野宿しました。まだ明け切  
らない薄暗いころでした。もやがかかっています  
たが、その向こうでわいわいと人声がすると思っ  
たら、満人たちが日本人の家から食糧や衣類、布  
団など手当たり次第に略奪して走り回っているの  
です。その有様を見て、やりきれない思いがしま  
した。昨日から散々待たされたので、お焼きもな  
くなってきました。家はさほど遠くなかったの  
で、防寒用にネンネコを取りに帰ってみてびつく  
りました。タンスは引き出しごと持つて行か  
れ、衣類や食糧は何一つありませんでした。飼っ  
ていた綿羊二頭と鶏も、みんな持つて行かれてい  
ました。その足で仲良くしていた満人の所に行っ  
たら、「私ではない、タンスは誰々が、食糧など  
は誰々が」と弁解していましたが、私は「もうそ  
のことはいいから、責めないから」となだめ、お

焼きとゆで卵を作ってもらって駅に戻りました。

やっと夕方六時ごろ列車が来ましたが、何と石  
炭運搬用の屋根のない貨車でした。この無蓋車に  
部落ごとに乗り込みましたが、人と荷物でぎっし  
りで、身動きもできず、足を伸ばすこともできま  
せんでした。こんな中で、四歳になる子は子供心  
にも何かを感じ取ったのでしょう、ぐずりも泣き  
もしませんでしたので助かりました。駅にあれだ  
け大勢の人が集まっていたのに、全員乗れたのか  
分らないうちに発車しました。今振り返って考  
えても、あのときの心境は無我夢中としか言えま  
せん。もちろん、また戻って来られるのかななど  
いうことは、頭の中にはありませんでした。

汽車は走ったり停まったりのろろ運転で、普  
通二時間もかからないところを、翌朝やっと佳木  
駅に着きました。まず駅に近い軍の兵舎から赤  
い炎が上がっているのが目に入り、見れば市内は  
火の海で、黒煙が空一面を覆って薄暗くなってい  
ました。汽車はいつ出るか分かりませんが、待つ

しかありません。ホームの傍らで炊事をする人もいました。弥栄でも朝から待たされていましたが、やっと夕方出発することになり、みんなで汽車に乗り込みました。途中兵隊さんたちが乗った列車とすれ違うたびに、「頑張って！」とお互い励まし合って、西と東に分かれました。

雲行きが悪いなど心配しているうちに、雨が降り出しました。だれも雨具を持っていなかったうえに、無蓋車でしたから、ただ濡れるばかりでした。一緒に乗っていた岩手班の仲間で、男性は菅原三津四郎、菅原登さんの二人だけでした。女の子供では雨を防ぐ仕掛けを作ることでもできず、雨が止むのをじっと待つだけでした。八月半ばとはいうものの夜になると気温が下がり、雨に濡れた体は冷えて大人でも震えが来るほどですから、幼い子供たちが身にこたえるのは当然のことでした。あちこちで高熱を出してぐったりし、やがて息を引き取る子も出たのです。

次の日に雨は止みましたが、貨車の中では着替

えもできず、自然に乾くのを待ったり、停車した駅で着替えたりしました。各自が持参した食糧も底をつき、幼い子供たちは空腹とストレスから病気にかかってしまいました。無蓋車の中は降り続いた雨が溜まり、荷物は水浸しになってしまいました。途中、南又<sup>ナガサ</sup>という駅に停車したときに、弥栄村引率者の方の計らいだったと思いますが、炊き出しの食事が配られ、久しぶりに生き返ったような気持ちでした。列車は八月十七日、<sup>スイカ</sup>綏化に着きました。

#### 四 綏化での避難生活

綏化駅から長い行列を作って、徒歩で収容所に入りました。暑い日照りの中をぞろぞろと歩いて来た私たちに、地元婦人会の方々からお握りをいただいてほっとしました。子供たちも今までのつらさを我慢していたのが、ゆつくりご飯をいただき元氣を取り戻しました。婦人会の方々に感謝の気持ちでいっぱいでした。

私たちの宿舎は、軍の飛行場の格納庫でした。そこで、以前小金森さんの所に手伝いに来ていたお兄ちゃんが偶然私たちを見付け、子供を肩に乗せてくれました。子供は大喜びでした。子供が、お兄ちゃんの頭を叩きながら大声を出してはしゃぐ姿を久しぶりに見て、本当にほっとしました。そのお兄ちゃんは、今どうしているか分かりません。

格納庫で持参した毛布、角巻きを床に敷き、今夜から親子がここで手足を伸ばして寝ることができのです。弥栄を出てから数日間のことでしたが、体は疲れ頭の中は真っ白で、何をどう考えればよいのかまったく分かりませんでした。

北満から大勢の避難民が次々と收容されてくるので、広い格納庫もたちまちいっぱいになりました。しばらくの間、炊き出しをしてくれましたが、米など食糧が配給され、自炊することになりました。ここで初めて終戦になったことを聞かされましたが、まさか日本が負けるなんて思っても

いなかっただけに、召集された主人はどうしているのだろうか、弥栄村はどうなるのか、そんなことを真剣に考えていました。

格納庫では、冷たいコンクリートの床にアンペラやむしろを敷いただけで寝いたので、体の冷えと栄養不良で幼い子供たちが毎日亡くなりました。亡くなった子供の遺体は、男の人たちが原っぱの隅に埋葬しました。夜になると、暗い格納庫のあちらこちらでお灯明がともり、本田先生の奥様や、新潟班の小玉さんがお経を読む声と、母親のすすり泣く声が聞こえました。

弥栄村で召集された岩手班の菊地参治さんと佐藤丙午さんが、軍隊が解散したからといって、緩化の收容所に家族を訪ねて来ました。菊地さんが私に「あなたのご主人はハルビンにいましたから、近いうちに帰って来ますよ」と言ってくれました。本当かなと思いましたが、しばらくして帰って来ました。半月足らずの別れでしたが、主人が帰って来てやっと気持ちが落ち着きました。

私の四歳の子供がジフテリアにかかって、あっけなく亡くなってしまいました。高粱コウリヤウのお握りをおはぎと思い一口食べましたが、飲み込めなかったのはかわいそうでした。主人が看取れたのが何よりの慰めでした。子供の遺体はさみしくないように、ここで亡くなった子供たちと一緒に埋葬しました。この後も、三、四歳の子供がほとんど亡くなったのは、本当にお気の毒でした。綏化の格納庫の周りには、弥栄以外の方々の遺体もたくさん埋葬されています。また、隣の格納庫には、中学校を出たばかりの少年義勇隊の子供たちが大勢収容されていました。子供ばかりで、満足に生活できないのを見ながら、皆自分のことが精いっぱい、何ひとつ面倒を見られなかったのが心残りでした。

私は、この地で子供を亡くしたことを一時も忘れたことはありません。いつか綏化を訪ねてお詫びをし、弔いたいと思いつながらだんだん年老いてしまい、果たせませんでした。平成七（一九九

五）年八月、長女が弥栄会友好訪中追悼の旅に参加し、私に代わって供養してくれたことを感謝しています。

九月になると、北満の朝夕は秋風が身にしみるようになります。温かい所へ移動できないかと思っていましたら、上に立つ方々のお骨折りで、南満の大連へ移動することになりました。乗車区分を決めて、十班までが第一陣と決まりました。岩手班は第八班でした。今度の汽車は屋根付きの貨車で、窓は小さいのが付いているだけでしたが、皆が何とか座れました。少しでも日本に近くなることは大きな喜びでした。

綏化を発つたのは九月十五日でしたが、今度の列車も走ったり停まったりの繰り返しで、思うように進みません。列車が停まると満人の子供たちが長い棒を窓から差し込んで、品物を縛って寄せと騒ぎ立てました。ソ連兵が無理矢理貨車の扉を開けて侵入し、腕時計、万年筆、革製品などを欲しがり「ダワイ、ダワイ」と略奪するのです。

銃を持ったソ連兵の暴力に、主人たち男の人も何の抵抗もできず、ただ立ちすくんでいるだけでした。私もトランクと水筒を持って行かれましたが、貴重品を入れたハンドバッグはお尻の下に敷いていましたので、持って行かれずに済みました。

列車が駅に停まるわずかな時間に、オムツを洗ったり食事の支度をしたり、何でもしました。

私はパイナップルの空き缶を拾ってきて、それでご飯を炊いて、親子四人の食事を作りました。

ここで弥栄種畜場の堀地先生が、ソ連兵に連れて行かれるという悲劇が起りました。奥様がお気の毒でした。さらに気の毒なことに、わずかな停車時間に、亡くなった我が子をホームの片隅に埋める人や、鉄橋から川に流す人がいたことでした。こんなことが毎日のように起こりました。このような悲惨さは、体験した人にしか理解できないことだと思えますし、皆さんにお話したくないことでした。

## 五 大連での生活

綏化を出て十日もかかって、九月二十四日やっと大連に着きました。綏化に比べて大連は綺麗な街並みが続き、街路樹も茂っていて街全体がなんとなく平穏な空気に包まれていました。戦火を受けない街は綺麗だなあ、と思いました。收容所まで歩くことになりましたが、街中を乞食こじきのようなかつこうをした避難民がぞろぞろ歩く姿は、大連市民には異様に見えたことでしょう。

大連実業学校が收容所と決まり、岩手班はちょうど一室にまとまって入りました。弥栄を出てから初めてゆつくり手足を伸ばし休むことができました。内地に帰るまではここで生活できるんだ、と今までにない喜びを感じました。ここで配られたお米のご飯とお握りを、感謝の気持ちいっぱいいただきました。

実業学校に收容されると、早速日本の方々から援助物資や食料品をいただきましたが、これは大連市内の県人会や婦人会やそのほか大勢の市民の

方々による、着の身着のままの私たちを見かねた、善意の援助だったのです。

弥栄を出て一カ月半が過ぎ、今までの苦労がたたったのか母乳が出なくなつたので、二歳の子が栄養失調になり、ついには食べ物も受け付けなくなつてしまい、看病のいかにもなく亡くなりました。大連に着いて一週間ほど経つた十月一日でした。援助物資でいただいた着物を着せて、裏山に埋葬してもらいました。石だらけの山で、深く穴を掘ることができず、土を掛けることは掛けたのですが、翌日行つてみると犬が掘り返したのか、むき出しになっていました。ときには、人が着衣をはぎ取ることもありました。本当に見るも無惨な光景でした。

綏化と大連で二人の子供を亡くしましたが、二人とも収容所で亡くなつたので、形ばかりでも葬れたのが何よりだつたと思つています。鉄橋から川に投げ込まれた子供さんのことを思えば、満州の大地に埋葬できたことはせめてもの供養だと、

心を慰めているのです。

長女が、翌年の夏に腸チフスにかかり満鉄病院に入院し、私が看病することになりました。すでに子供二人を亡くしてただけに、この子にもしものことがあつたらどうしようと、必死で看病したかいがあつて、栄養など摂れなかつたのに、幸いにも全快して退院できました。ところが、今度は私が同じ病気にかかり、主人が看病に当たらなければならず、仕事に出られなかつたのは大変でした。食事といつても高粱の重湯です。これがどうしても喉を通らないのです。主人には「これを飲まなければ内地には帰れんぞ」と言われ、ご飯茶碗一杯をやつと飲んだものでした。主人の温かい看護を受けて、三カ月の入院で実業学校の寄宿舎に帰ることができました。

主人は同じ岩手班の高橋源蔵さんと一緒に、糞尿汲み取りの仕事をしました。何人かの人が一組になつて、街のマンホールから糞尿を汲み取り、これを車に積んで処理場に運搬するのださうです

が、夜中から朝方まで大変な重労働のようで、主人は「疲れた、疲れた」と口にしていました。しかし、仕事を辞めればすぐに生活が行き詰まってしまうし、ほかに良い仕事が見付かるかどうか分かりませんでした。私の看病をしたときは、本部の方々のお世話になったようでした。

弥栄の学校で子供たちがお世話になった小野先生が病気にかかって、収容所の地下室に隔離されていることを聞いて、子供たち二、三人が見舞いに行ったそうです。親には内緒だったようです。

先生は大変喜ばれたということでした。この地下室に隔離された病人は、上の部屋に戻れずに亡くなる人が多いと言われていましたから、子供たちもそのことを心配して見舞ったのでしょう。

大連に着いて避難生活を始めてからひと冬を越しましたが、引揚げについては何の音沙汰もなく、もうひと冬越さなければならぬかとあきらめていたところ、十一月中旬ごろ引揚げという話が伝えられました。待ちに待った朗報です。みんな

などんなにか待ちこがれていたことでしょうか。私たち親子は、一時死の世界をさまよいましたが、お陰様で元気になって皆さんと一緒に帰ることができるのも、主人の手厚い看護と神仏のお陰と、ひとしおの喜びを感じました。

大連で皆さんからいただいた布団や衣類を荷造りして、埠頭に集まったのですが、引揚船がまだ入港していなかったので、貨物倉庫に収容されました。船の入港を待っているうちに、半月も経ちました。この間にも亡くなる人がいて、本当にお気の毒でした。十二月に入ってやっと引揚船が入港、荷物の検査があつて、いよいよ乗船することになりました。待ちこがれた日がとうとう現実のものになりました。

十二月三日、大連を出港しました。これで満州とお別れだというさみしい気持ちはありませんが、やっと帰れるといううれしさが先でした。満州に渡ってから十年余り暮らした弥栄村のこと、仲良く交際していた満人の家族のこと、避難途中

の悲惨な出来事、亡くした子供のことなどが、次から次へと走馬灯のように浮かんできました。思い返して、うれしさと悲しさの入り交じった複雑な気持ちでした。

十二月八日、祖国日本への第一歩は、長崎県佐世保港でした。苦しい引揚げの道中で夢にまで見た内地。「ああ、本当に帰れたんだ」と、だれもが心の底から思ったことでした。佐世保でも引揚者用の施設に入り、検疫でDDTを頭から足の先まで何回もかけられた後で、久しぶりに入浴、今までの溜まった垢を流して、心身共にさっぱりしました。そして心のこもった食事が出されました。だしで炊いたおかゆの何と美味しかったことか。故国にいるという安心と、この美味しい食事。思わず涙があふれてきました。一週間ばかりここで疲れを癒し、それぞれの故郷に向かうことになりました。実家には、「家族三人、身一つを土産に帰りますのでよろしく」とはがきを出しました。

## 六 帰国後の状況

列車で故郷に向かう途中、窓から広島原爆被害の凄惨な様子を見て、戦争の恐ろしさをつくづく感じました。上野に着き東北本線に乗り換え、故郷岩手に向かいました。一ノ関駅も空襲に遭ったようでした。やっとたどり着いた我が家では、皆温かく迎えてくれました。

実家では年老いた両親と兄嫁と子供が三人で暮らしていました。兄は召集されて、まだ帰っていませんでした。うちは戦前は米屋でしたから、ご飯は腹いっぱい食べられると思っていました。ところが、今まで米のご飯など食べていなかったのが、ご飯がなんとなく喉を通らず、その上胸焼けがして困りました。しばらくここで世話になっていましたが、母の実家でおばあさんが一人暮らしをしていたので、そこで一緒に暮らすことになりました。主人は買い出しや薪木取りに行ったりしていました。そのうちセメント会社で働くことになりました。

主人に代わって私が買い出しに行くことになりましたが、初めて知らない所を訪ねて、やっと買い求めた米を持って帰る途中、運悪く取り締まりに遭い、没収されてしまいました。こんな窮屈な目に遭うくらいなら、前から話が出ていた北海道に行つて、自給自足する方がどれほどかまじだと考えました。

そうこうしているうちに、菊地參治さんと高橋源蔵さんが見えられて、北海道開拓を勧めてくださいました。住む所もあり、仕事も決まったばかりですが、いつそ北海道へと決心したのは主人より私の方が先でした。満州からの引揚げで散々苦勞してきたのですが、心配する親の反対を押し切つて北海道行きを決めました。これから先、いろいろな苦勞があるでしょうが、満州岩手班で苦勞した人たちも一緒なので、心強く感じていました。

## 七 北海道開拓とその後

昭和二十二年四月に、仲間と一緒に釧路管内標

茶駅に到着し、徒歩で三十分くらいの所にある、多和軍馬補充部まで行き、その厩舎で自分の間生活することになりました。主人たちは、ここから二里奥の入植地に共同宿舎を建てるために、毎日現地まで二里の道を往復しました。私たちも少しでも手伝いたい、屋根をふくヨシやカヤを背負つて毎日通いました。道路の両側には、大人の手でも回らないほどのナラの大木がうっそうと茂り、枝から太い紐のようなこげが何本も垂れ下がっていました。鬼気迫るといふか、とてもひとり歩きできるような雰囲気ではありませんでした。

ようやく仮の宿舎もでき上がつて、共同生活が始まりました。部屋の構造は至つて簡単で、中央に廊下があつて、廊下の両側が一段高い床になっていました。廊下の中ほどに炊事場が設けられていました。冬、吹雪のときは隙間から吹き込んだ雪が枕元に積もっていましたし、布団の襟は吐く息で白く凍るような粗末な作りの家でしたが、満

州と違って、だれに襲われたり邪魔されたりすることも無い安住の地でしたから、毎日が楽しかったものです。宿舎の周りは自然の恵みが豊かで、さまざまな山菜が春から秋まで取りきれないほどで、野菜に困ることはありませんでした。

各人の住宅ができるまで、男たちは開墾や建築、炭焼きと、仕事を分担して頑張りました。一戸当たり二十町歩の土地に住宅が完成すると、抽選で家の割り振りを決めました。私たちはくじ運が悪く、平坦地が少ない所が当たりました。そのため開拓が遅れ、皆さんより一段と苦労しました。畑には、自給自足の建前からジャガイモとそばを植え付けました。

冬の間の生活資金を確保するために、明けても暮れても炭焼きでした。開墾地の立木を切つてそれを炭に焼くのですが、炭焼きは初めてですから無我夢中でした。最初私たちは畑作を始めましたが、気候が悪く、根釧原野は畑作に向かないということが分かって、酪農に転換、乳牛を飼い、だ

んだん経営を広げるようになりました。搾った牛乳を農協の処理場まで自分で運んでいましたが、集乳トラックが各戸を回るようになり、経営は充実してきました。しかし、酪農の大型化は私たちが考える以上に早く進み、これからは機械による大型経営でなければ成り立たないという時代になり、主人は老体で機械音痴、私と娘とで酪農を続けることはとても無理だと思い、末娘が仙台の大学を卒業した機会に、思い切つて離農して釧路に出ることにしました。

主人が大船渡のセメント会社で働いていたとしても、娘を大学まで出すことはできなかったと思っています。両親の反対を押し切つて北海道の開拓に入ったのだから、一日も早く親を安心させたいと、なりふり構わず一生懸命に働きました。娘が仙台の大学に入学するとき、私も一緒に行つて久しぶりに母に会いました。母はやっと安心したようでした。

長女は、平成七年八月「弥栄会友好訪中追悼の

旅」に参加させて頂き、引揚げ途中亡くなった方々を埋葬した場所を訪ね、供養してくれました。長女にしてみれば、あの戦争がなければ弟たちも一緒に元気に暮らしているだろうに思いますが、この旅に参加して供養に勤めたことで、胸のつかえがおりたようだと話してくれました。この話を聞いて、主人も私もいつも心の隅に引っかかっていたわだかまりが解け、肩の荷が軽くなりました。

主人は平成四年に九十一歳で亡くなりました。現在、私は老人クラブに加入して、皆さんと楽しく旅行をしたり、書道のサークルに参加したり健康ダンスに興じたり、楽しい日々を送っています。このように幸せな毎日を送っていただけるのも、あの引揚げの体験や北海道開拓の試練に負けないで頑張ってきたからだ、と思っております。これからも何事も前向きに考え、子供たちに迷惑を掛けないように過ごしたいと願っています。

## ノーモア 満州

岩手県 多田



### 一 ひとときの平和

昭和十二（一九三七）年五月二十一日、私は当時岩手県和賀郡土沢町大字北成島（現在の和賀郡東和町）で生まれた。昭和十二年というと、日中全面戦争に発展していくきっかけとなった盧溝橋事件キョウコウが起こった年である。前年の昭和十一年には二・二六事件が起こるなど、軍国主義が色濃くなっていった時代であった。

私が引揚げ後成人してから、私の家の戸籍を見てみると、明治三十七（一九〇四）年三月十七日に分家していて、資産としては山あいに猫の額ほどの田畑を持っているだけで、経済的には貧しかったようである。祖父母が毎日細々と農作業を続け、父は黒沢尻（現在の北上市）にあるK銀行